世界を驚かせた 女流尺八家の出現

中島聖山

3回にわたって都山流の発展について触れてきたが、今回は琴古流竹友社を取り上げることとし、特に世界的に活躍した人物に焦点を当ててみることにする。

都山流の場合は、各地に医者を業とするものが中心となり、同好会を組織して、中央から専門師匠を招聘する受け皿作りを進める一方、地元の流人は北海道に踏みとどまり、あくまで組織の底辺を支える役割に徹したのに対し、竹友社の場合は、高橋渉童や佐藤富士江などのように、より高い技術を追い求め、自ら上京することによって自分の芸を高めるとともに、新たな一派を組織する志を達成しようとした。

こうしたことが、のちの都山流の全体主義に対する、琴古流の個人主義を形成する土壌となったのではなかろうか。

琴古流竹友社の沿革

琴古流の最大会派である竹友社は、初代川瀬順輔が明治27年に創設した全国的規模の派である。

初代川瀬順輔は明治3年10月10日に山形で生まれ、17歳のとき虚無僧だった榊原三虚山に手ほどきを受けた。尺八の本格的な修業を求めて、20歳で上京し二代目荒木古童に入門し、尺八人生の第一歩を踏んだ。

明治27年に竹友社を創立するとともに、南日本を虚無僧行脚し、明治35年からは東京麹町区富士見町に教授所を開設して、本格的な門人の育成にあたった。

兄弟子だった東京音楽学校の上原六四郎（虚洞）に符点式楽譜の表記法を学び、大正2年には符点式琴古流尺八楽譜を出版した。折しも大正時代の邦楽ブームと楽譜の出版とが相まって、竹友社は急速な勢いで全国に普及することとなった。

大正14年までには日本全国は勿論のことながら、北は中国大陸や千島・樺太・朝鮮半島から南は台湾まで、231名の師範が各地で教授所を開設し、楽譜による門人の育成にあたっていた。

大正13年に渉風社を結成した高橋渉童は、当時専門師範として東京で活躍していたし、のちに渡道し北海道の竹友社発展に寄与した関段敏男は、台湾の台中市で特志師範として活躍していた。

北海道では函館の阿部凶介や小樽の池畑初三郎・尾山紫童・大泉正一（室蘭から移住した。旧姓続治郎）、札幌の斉藤玉洞、網走の井上正夫など11人の師範が、都市を中心に活躍していた。特に斎藤玉洞は北海道における唯一の専門師範として、全道各地に出張稽古をするなど、広範囲な活動を展開していた。

しかし、これら師範名簿に名を連ねないながらも、それ以上の活動を展開している人物が2人いた。その1人は北海道大学農学部教授で「尺八博士」の異名で呼ばれた松村松年博士であり、もう1人は女侍で世界を驚かせた室蘭の女流尺八家、佐藤富士江である。

氏名	都市	資格
阿部凶介	函館	特志師範
池畑初三郎	小樽	〃
尾山紫童	〃	〃
大泉正一	〃	〃
斉藤玉洞	札幌	専門師範
阿部登吉	〃	特志師範
阪口實	旭川	〃
三浦信三郎	〃	〃
稲村光三郎	夕張	〃
井上正夫	網走	〃
斉藤信一	稚内	〃

竹友社師範分布状況（大正14年10月現在）

女流尺八家の誕生

江戸時代に尺八が普化宗の宗器として扱われるようになってから、尺八は男性独自の楽器と思われてきた。しかし、実際には古くから女性のなかにも尺八を演奏する人達がいた。

慶応3年に発行された「尺八名家懇望人記」には、大阪に2人の女性尺八家が存在したことが記されている。また、明治4年発行の「尺八名家懇望人記」には大阪2名、兵庫2名、備後3名の計7名が記載されている。従って、これら女性尺八家に教授を受けていた女性も含めると、相当数の女性尺八愛好家が存在したことになる。

さて、それでは北海道の女性尺八家の草分けは誰なのだろうか。明治時代の資料がないので正確なことは分からないが、大正の終わり頃に室蘭で女流尺八専門道場の看板を掲げた佐藤富士江ではなかったか。

彼女は女子大を出ているインテリであり、西洋音楽に精通していて、チェロの演奏家でもあった。当時、女性の身で大学を卒業し、しかも洋楽器を演奏できたとなると、西洋崇拝者のように思えるが、彼女はそうではなかった。彼女は柔道や剣道の武術にも秀でていた。いわば今でいうスーパーレディーで、

日本舞踊のお写真なら（ポーズ、舞台）
藤本写真館
（各地出張撮影も致します）
〈スタジオ〉札幌市豊平区平岸4条4丁目4-10　TEL821-3515

好奇心の旺盛な体格のいい女性だった。

大正6年頃、東京で大学時代に尺八を始めたらしいが、本格的に活動しだしたのは大正11年、室蘭に帰ってからである。

女性が尺八を始めた動機

男女平等が一般化した現在でも、女性が尺八を始めるには相当な勇気がいることだと思うが、大正初期にあっては本人自身はともかく、周囲の抵抗が大きかったに違いない。そうしたなかで彼女が尺八を始めた動機は何だったのだろうか。

まず彼女は尺八を一つの楽器として捕らえ、男女の区別なく誰でも楽しめるはずだと考えた。もし、尺八が女性の能力を越えたものであるとすれば、婦人の能力問題にかかわることであり、可能かどうか真相究明のため是非とも挑戦してみなければならないと決心したのである。

単なる負けん気と興味本位で始めた尺八だったが、5年ほどで自分のものにしてしまうと同時に、尺八の魅力に取りつかれてしまったようである。

彼女は尺八を唯一の友と表現し、「夏は渓流に涼を得、また月明かりには海辺を逍遙しながら、ある時は湖水に舟を浮かべながら、また秋には満山の紅葉を眺めながら、あの哀調を帯びた独特の旋律は随所で私の心を慰めてくれます」と、まさしく尺八三昧の日々を吐露している。そして、尺八を吹いている間は、俗界のすべてからのがれて、無我の境地に入ることが出来るまでになったと精神面の充実を訴えた。

彼女の勇気ある挑戦の結果、尺八は女性にも演奏可能であることが実証された。そして、稽古を重ねることによって、男性に負けない大きな音を出すこともできる確証を得たのである。

それではなぜ、女性の間に尺八が普及しないのか。この点についても彼女は究明した。その結果、1つには女性には不可能だとする先入観があること。2つには男性ばかりの中に、若い女性が入っていけないこと。3つには女性は体力がないので続けられないこと。以上3点を普及の阻害要因として掲げながら、女性が尺八をした場合の効用として1つには趣味の上から、2つには体力増強の上から、3つには美容の上から、是非とも女性に勧めたいと力説した。

吹奏中の佐藤富士江女史

尺八の稽古がなぜ女性の美容に良いかというと、尺八を吹いていると頬の筋肉が発達して、年をとっても頬がこけないからだと彼女は言う。また、夜道を一人で歩く時などの護身用として、尺八は最適であるとも言っている。

彼女の尺八に対する挑戦は、当初の目的をはるかに越える大成功に終わった。

女流尺八専門道場の開設

北海道時代の彼女の活躍の様子を伝える資料はほとんどないし、彼女のことを知っている人もいない。

限られた資料を基に推測してみると、彼女の父である佐藤富太郎の尺八の影響を受けた佐藤富士江は、大学時代に東京で川瀬派の尺八を勉強した。

室蘭に帰郷した後、地元の竹友会に入り、父と一緒に合奏研究会などに参加していた。

当時、室蘭には三宅竹風が創設した室蘭竹友会があり、有志が集って研鑽を積んでいた。しかし、会主の三宅竹風が修業のため、師を求めて上京したことから、その後は宮田竹齢が会をまとめていたが、宮田竹齢も仕事の関係で樺太へ転勤してしまい、彼女が室蘭に帰ったときは、活動を支える人物がいない状態だった。

彼女は消滅状態にあった竹友会を建て直すとともに、有志を集めて合奏研究会等を始めた。

合奏研究会は地元の糸方である藤原社中の協力を得て、毎月一回開催されていた。次第に会もまとまりを示し、大正11年1月7日には室蘭市公会堂で竹友会の新年演奏会が開催された。会には佐藤親子のほか、高橋紫童や久慈治信、続治郎など12人が参加して、盛大に行われた。

また、大正11年7月20日に佐藤宅で行われた佐藤富士江主催の研究会では、彼女は琴古流本曲「鹿の遠音」を独奏した。

流れに乗った彼女は、持ち前の積極性を活かし、次々と独創的なアイディアを実現していった。秋には鈴蘭会を組織し、女性尺八道場を開設した。大正12年の雑誌「三曲」に女流尺八専門道場鈴蘭会として、年賀広告を出している。また、同年1月14日には、室蘭市公会堂で第1回目の鈴蘭会の演奏会を開催した。

謹んで新年を賀し奉り候

鈴蘭會（女流尺八専門道場）

佐藤富士江

北海道室蘭市幸町九

年賀広告

当時、どの程度の女性の門人が集まっていたのか分からないが、彼女の思うようには行かなかったのであろう。彼女は春になるのを待って上京した。と言うのは、大正11年5～6月号の雑誌「三曲」に投稿した『私が尺八を始めた動機』に対する反響が大きく、特に東京方面からぜひ尺八を勉強したいという女性の声が多かったからである。室蘭にいるより、上京すればたくさんの女性の門人が得られると判断したのであろう。

彼女はまた尺八普及の糸口を、尺八による西洋音楽の吹奏によって求めようとした。尺八の感傷的な音色にあったトロイメライやノクターン、セレナーデ等を取り上げ、バイオリンの楽譜を利用して主旋律を尺八で演奏した。

彼女はその後結婚し、鈴木富士江となったが、独身時代の夢を捨てず、大正14年9月からは、東京市牛込区矢来町4番地で尺八道場

CITY

■建築土木資材の総合商社

シティ・キョードー株式会社

〒062 札幌市豊平区豊平3条8丁目1番26号協同ビル

TEL(011)811-6777㈹ FAX(011)824-5396

事業内容

- 建築一式工事、とび・土木・コンクリート工事、タイル・れんが・ブロック工事、ガラス工事・内装仕上工事、建具工事等の請負・設計・施工監理
- 建築・土木資材の販売
- 建築・土木資材及器具建具等の輸入・輸出
- 建築・土木資材並びに機材のリース業
- 砂利・砂・砕石の採取販売

を開設し、東京音楽協会を組織した。

しかし、女性専門道場ではなく、女子部と男子部の2部制とし、女性でも稽古に通いやすい環境を作ったにとどまった。

女1人欧州尺八行脚に出掛ける

結婚によって彼女の好奇心にもピリオドが打たれるかと思ったが、そうではなかった。

昭和2年、彼女は東京の道場を閉鎖して、1人欧州へと尺八行脚に出掛けた。新婚のさなかに、どうしてこのような行動がとれたのか不思議である。離婚していたのか、それとも夫の理解のもとに出発したのか等、詳細は全く分からない。

欧州旅行の目的は2つあった。その1つはチェロの勉強であり、2つ目は尺八による西洋音楽の吹奏研究であった。

彼女はまずフランスのパリに行き、そこでイタリア人の作曲家イルム・ピゾーと知り合い、オーケストラの伴奏による尺八のための曲を数多く作曲してもらった。ピゾー氏は尺八音楽に理解を示し、琴古流本曲の「鹿の遠音」や「鶴の巣籠」にも、ピアノで伴奏してくれたというから、単なる興味本位でなかったと思われる。

ヨーロッパ尺八行脚の鈴木富士枝女史

作曲家のイルム・ピゾー氏がパリの上流階級と通じていたことから、彼の紹介で伯爵邸の茶会で尺八を演奏したのが契機となり、その後はあちこちから声が掛かるようになった。

時にはドウメルグ大統領が出席しているような会でも演奏した。

ある東洋研究家の集まりで尺八を吹奏したとき、「日本では尺八は男の吹く物と聞く。尺八は昔、侍が仇を探すために路を吹いて歩いたものだが、あなたは外国に仇を探しにきたのか」という質問をされたという。その時、彼女は「そうです。私は女の侍で柔術や剣術もやりますから、それで男の侍がやる尺八も吹くのです。そして、私の敵は現代の日本には見つからないので、こうして西洋まで探しにきたのです」と言ってみんなを笑わせたという。

夏にパリ郊外で日本祭があったとき、彼女は招かれて尺八を吹いたが、それだけでは収まらず、振袖に白たすき、鉢巻といういでたちで真蔭流の剣の型を披露し、集まったフランス人を驚かせた。

彼女は常にパリを本拠地にし、チェロの勉強をしていたが、時間を作ってはドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、イタリア、スペイン、ポルトガル等へ出掛けては尺八を演奏した。

ベルギーの王立劇場では、オーケストラの伴奏で琴古流本曲「鶴の巣籠」を吹奏したという。

ルネッサンス時代のチェロを入手

彼女がパリでピゾー氏に師事していた時、ルネッサンス時代にイタリアの名工により制作されたチェロと出会った。当時、10万フラン（4万円）の価値があるといわれたものである。

ピゾー氏に名器ともいえるチェロを見せられてから、彼女はこれを入手すべく一念に燃えた。1年半かけて懇願した結果、ピゾー氏は「そんなに言われるなら仕方がない。私も根負けした。日本人というものは恐ろしいものだね」と言って大切にしていた名器を譲ってくれたという。

帰国後、このチェロを弾いていたところ、音楽界の権威者ウェルク・マイステルが「珍しいチェロだ」と折り紙をつけたことにより話題になり、ついには宮内省の耳に入った。当時の宮内省雅楽部長から話があり、そのチェロは宮内省御買上となったのである。

国宝になるほどのチェロを演奏していた鈴木富士江を知る人は少ない。自分で志したことはことごとく成し遂げる、彼女の意思の強さと勇気には驚嘆せずにはいられない。

帰国、女流尺八協会の設立

昭和7年に4年間の欧州行脚から帰国した彼女は、東京市牛込区市ヶ谷の駅前にあった市ヶ谷ビルに教授所を開設し、女流尺八協会を設立した。

會員募集

尺八音樂愛好の女性は當會へ
教授は 會長 自ら 擔任

入會希望者は毎火金曜日
（會費制度）
當協會へ申込まれたし

女流尺八協會

牛込區市ヶ谷驛前市ヶ谷ビル
電話 牛込二九五〇番

會長 鈴木藤枝

全然しろうとの方でもすぐ吹けるやうになります（初心者歓迎）
尺八も備へてあります、手紙で御照會御返事致します

募集広告

しかし、門人の多くは男性であり、女性に尺八を習う違和感を感じていたに違いない。彼女が有名になり、活躍すればするほど、竹友社内の抵抗は増したであろうし、女性を売り物にしている印象を強くしたであろう。そうした中にあっても、彼女の独走は続いたのであった。

（以下次号）

掲載写真＝日本音楽社刊「三曲」第2巻・第24巻から転載

舞踊小道具
舞台美術

近江屋

札幌市東区北36条東4丁目
☎ (011) 731－6866